

御殿形厨子の研究（4）

— 陶製御殿形厨子の底孔に着目して —

宮城 弘樹

はじめに

2013年に門上秀叡・千恵子が収集した厨子190基が那覇市立壺屋焼物博物館（以下、同館と略述）によって収蔵され、同館の基幹コレクション「門上秀叡・千恵子コレクション」として活用が図られている（以下、コレクションと略述）。既に、精細な写真図録によって紹介・報告されており（同館2014）、コレクションを用いた研究も着手されている（吉田2013、2015、鈴木2015・ほか）。コレクションはバリエーションも豊かで、紀年銘資料が多いことから、厨子の時間的推移を考える上で定点資料になると評価される。

筆者は御殿形厨子の時間的推移について関心を寄せ編年研究に寄与するために幾つかの論文を執筆した（宮城2019・2020 a b）。この中で赤焼御殿形厨子と荒焼御殿形厨子（以下、御殿形厨子を省略）の底孔の数や孔の開け方に相違があり、これを時間的推移と想定した（宮城2020 a）。底孔に限らないが、御殿形厨子の製作についてレポートした倉成多郎は孔の穿ち方について「厨子甕をつくる各工房で、穴の穿ち方など細かい部分で差異が生じていた可能性があり、これを利用すれば工房や技術指導の流れを特定する資料になるかもしれない（倉成2005）」と指摘する。このように、製作時の細かい相違が工房や時間的推移を反映している可能性があり、本論では「底孔」に着目し、門上コレクションを用いて検討を行う。

1. 調査概要

対象資料は、コレクションの中の陶製御殿形厨子を対象とした。調査は、2019年7月16日、2020年3月4日、3月17日、8月22日に同館にて実施した。調査にあたっては、伊集守道氏、比嘉立広氏、又吉幸嗣氏とともに共同で実施した。特に労力を要する底孔を見るための資料の出し入れ、蓋の移動などでは、重量のある厨子を1点1点持ち上げる必要があった。本作業は三氏にご協力いただき、全点確認することができた。また、図版として使用した各厨子正面写真については、同館のデータ提供を受けた。

対象とする陶製御殿形厨子は、上江洲均分類（上江洲1980）の、（四）御殿形【赤焼、荒焼、上焼本、上焼ツノ型、上焼コバルト掛け】とした。コレクションの厨子は全部で190基あるとされる（同館2014）、このうち87点を対象とした（付表）。対象とした厨子の中には〔58・

60・87] のように、やや典型的な御殿形厨子からはずれるものも含まれる。

調査は、厨子の屋根部の蓋をはずし、底孔を写真で記録し、孔の形状、サイズ、配置を中心に確認した。このため、本来であれば、裏返した外底の観察を行うことも重要と考えたが、外底の観察は資料の移動が大きく資料保存の観点からリスクが高いため、同館資料では実見を行っていない。なお、博物館登録番号を「No.」を付して紹介し、本論図番号は〔亀甲括弧〕で閉じて標記する。

2. 底孔と体部穿孔

コレクション中の陶製御殿形厨子 87 点の種別は、赤焼 24、荒焼 18、上焼 34、上焼ツノ型 11 である。また、型式分類は拙論（宮城 2020 a b）による分類を用いる。

御殿形厨子には基本的に底に孔が穿たれている。これは一般に焼成前に竹管状の工具で穿孔されたものである。蔵骨容器として内部に水が溜まるのを防止する水抜き孔としての機能とともに、焼成時の火のまわりを良くするためとされている。他方、屋門に穿孔される「透かし窓」とは別に、身の正面、側面、背面に複数の穿孔が認められる資料が少なからず存在する。この身に対する穿孔を本論では体部穿孔と呼称する。体部穿孔は穿孔する場所、孔のサイズや形状、個数にバリエーションが認められ、穿孔箇所と個数によって分類を行った（図 1）。

体部穿孔はコレクション 87 点のうち 16 点に認められる。コレクション内における数は決して多くないため、普遍化させるにはより多くの資料を確認する必要があり、断定的なことは言えないが、基本的には上焼に認められる技法と推測される。さらに、最も古式の型式に穿たれた〔27〕の事例を除くと、ほぼⅣ～Ⅵ式において認められ、特に上焼ツノ付き御殿形厨子に占有的である。Ⅳ式段階では、側面と背面に多く穿たれ、Ⅴ・Ⅵ式では正面も含み穿孔されるという傾向がある。

コレクションにおける各型式の占有率は、Ⅲ式で 3 %、Ⅳ式 50%、Ⅴ式 78%、Ⅵ式 100% となる（図 2、表 1）。コレクションが優品を選択的に収集されたことを鑑みて若干の偏りがあることを考慮しても、体部穿孔の有無が時代的な変遷をある程度示していると推測される。

他方、底の孔は、（図 4～6、付表 1）に示したとおりである。孔の配置について以下のように分類した。

孔が穿たれていないものを「無孔」。孔が穿たれているものは、配置によって中央に一つ孔がある「中央 1 孔」。縦横におおよそ整列して孔が配置されているもの。配置に一部ランダムになり、ばらつきがあるものを「変形」。ランダムに多数の孔が穿たれるものに分けられる「多孔」として呼称し、分類を行った。

このうち、整列するものは、その配置、数から、図 3 に示すように、身の底をのぞきこみ左右長軸方向を「行」、前後短軸方向を「列」と呼称し、3 行 4 列（または、3 × 4）のように標記した。行によっては前後の行から 1 個程度増減させ千鳥配列するものもあり、これらは小数点以を用いて個数の示す形で標記する。

確認例では 19 種に分類した上で、上記を含め (0) ～ (11) の 11 種 (+ 左記以外、分類保留のその他) にグルーピングを行った。

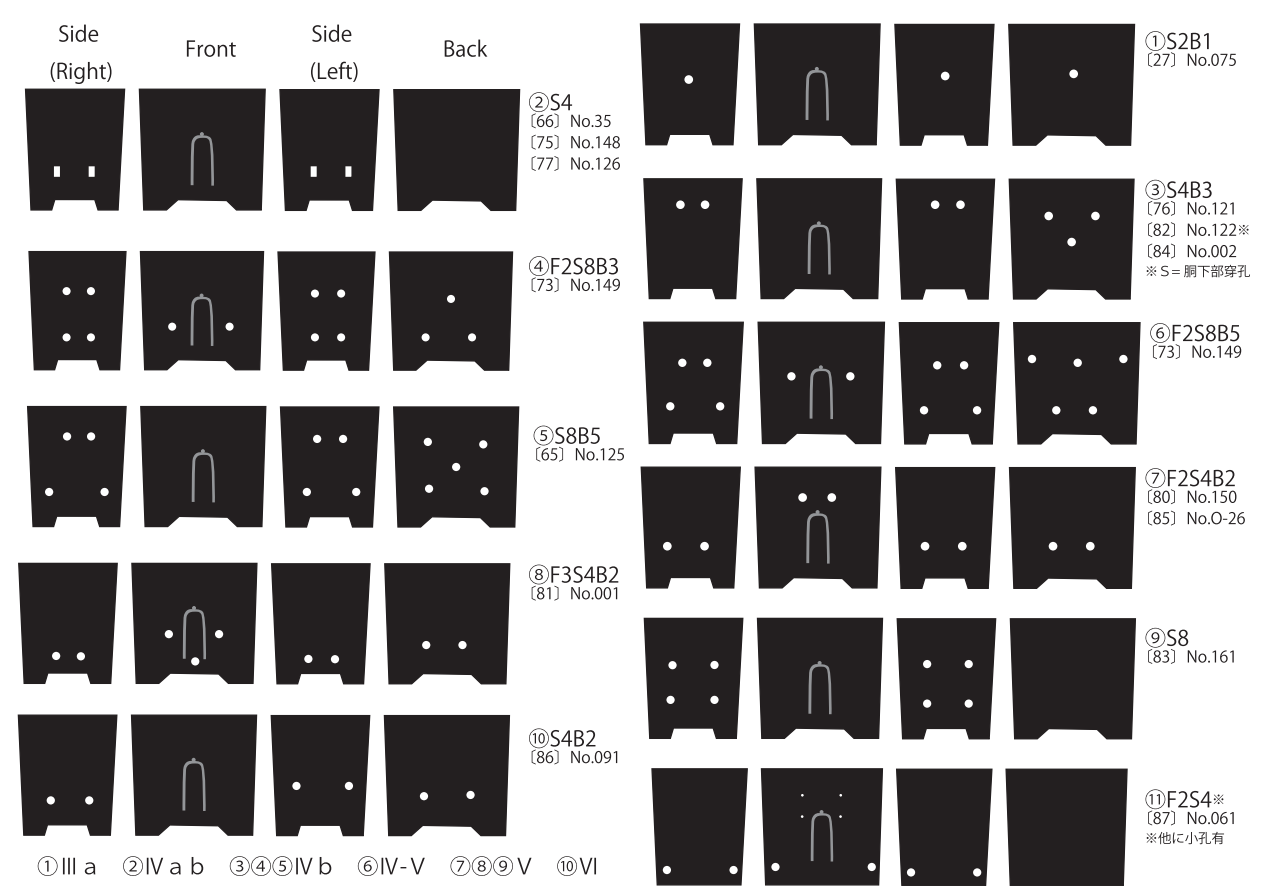


図 1 体部穿孔分類模式図

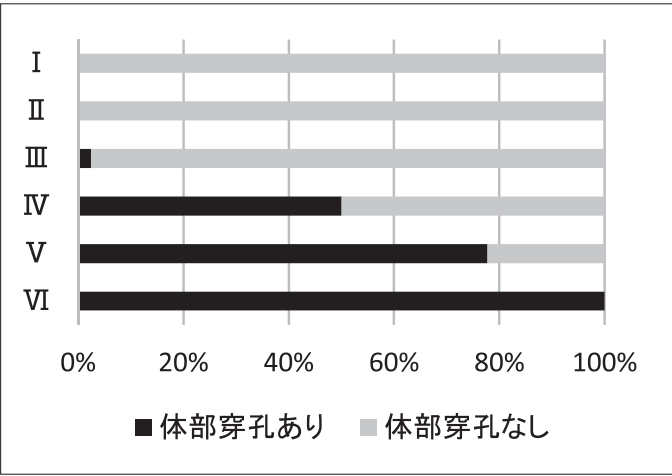


図 2 各型式における体部穿孔例の占有率

分類	体部穿孔		計
	あり	なし	
I	0	6	6
II	0	18	18
III	1	39	40
IV	6	6	12
V	7	2	9
VI	1	0	1
その他	1	0	1
計	16	71	87

表 1 体部穿孔と型式の相関

- (1) 無 孔：①無孔
- (2) 中央 1 孔：②中央 1 孔。
- (3) 2-3 孔：③ 1 行 2 列 (2 孔)、④ 1 行 3 列 (3 孔)
- (4) 4・6 孔：⑤ 2 行 2 列、⑦ 2 行 3 列 (6 孔)
- (5) 5 孔：⑥ 3 行 2.1 列 (5 孔)
- (6) 9 孔：⑧ 3 行 3 列 (9 孔)
- (7) 12-13 孔：⑩ 3 行 4 列 (12 孔)、⑪ 3 行 4.5 列 (13 孔)
- (8) 11 孔：⑨ 3 行 3.5 列 (11 孔)
- (9) 15-21 孔：⑫ 3 行 5 列 (15 孔)、⑮ 3 行 7 列 (21 孔)
- (10) 16-35 孔：⑬ 4 行 4 列 (16 孔)、⑭ 4 行 5 列 (20 孔)、⑯ 4 行 6 列 (24 孔)、⑰ 4 行 7 列 (28 孔)、⑱ 5 行 7 列 (35 孔)
- (11) 多 孔：⑲約 50 孔くらいがランダムに穿たれる
- (12) そ の 他：上記に該当しない配列

上記分類を、型式との相関で見えていく。

I 式は無孔と中央 1 孔が占有的である。前者は一部 IV 式や VI 式に認められるがこれらは目痕が残されるなど I 式は無孔とは異なる特徴を有する。また、I a と I b の穿孔を見ていくと、I a は無孔、I b は無孔と中央 1 孔で構成されており、無孔が最初に存在し、やがて穿孔されるようになったものと考えられる。

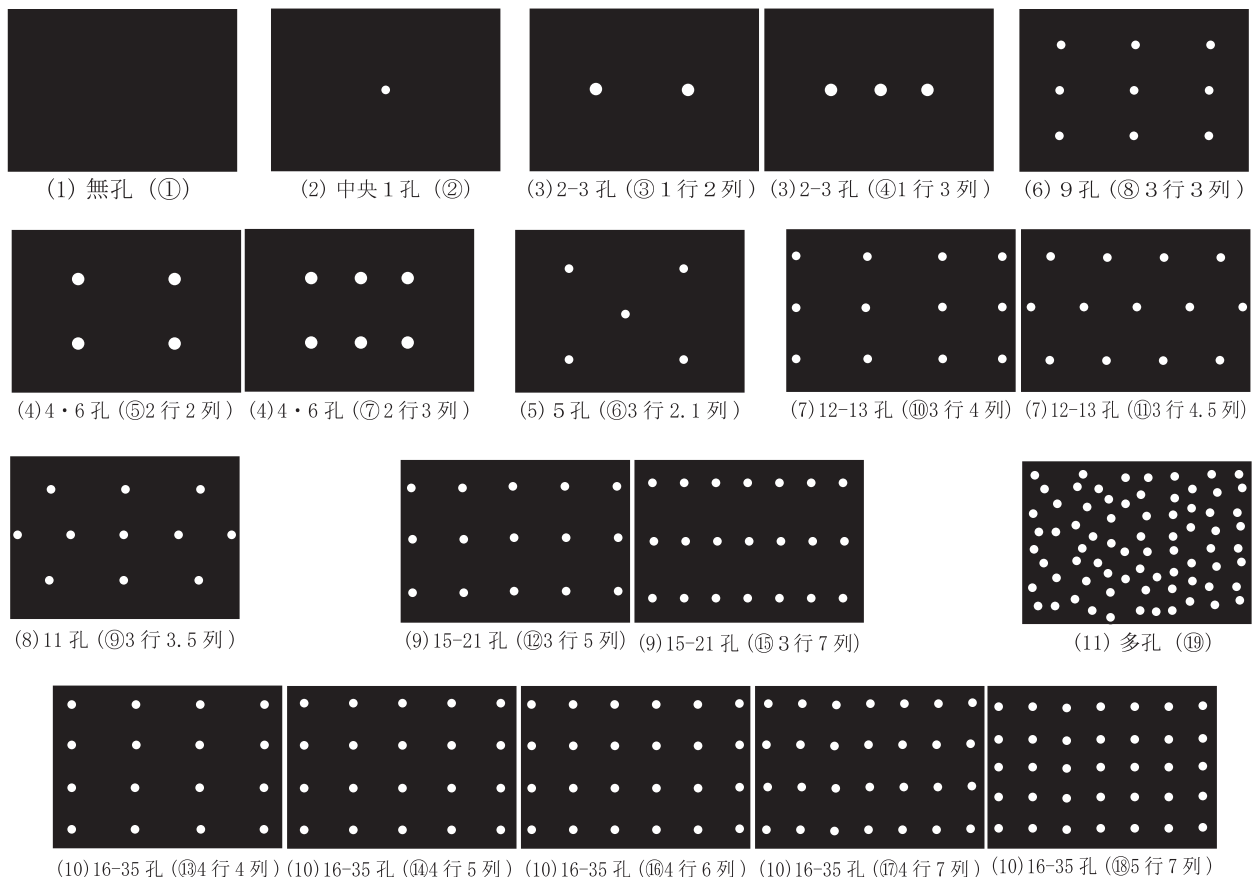


図 3 底部穿孔分類模式図



図4 壺屋焼物博物館所蔵陶製御殿形厨子 (1)



図5 壺屋焼物博物館所蔵陶製御殿形厨子(2)

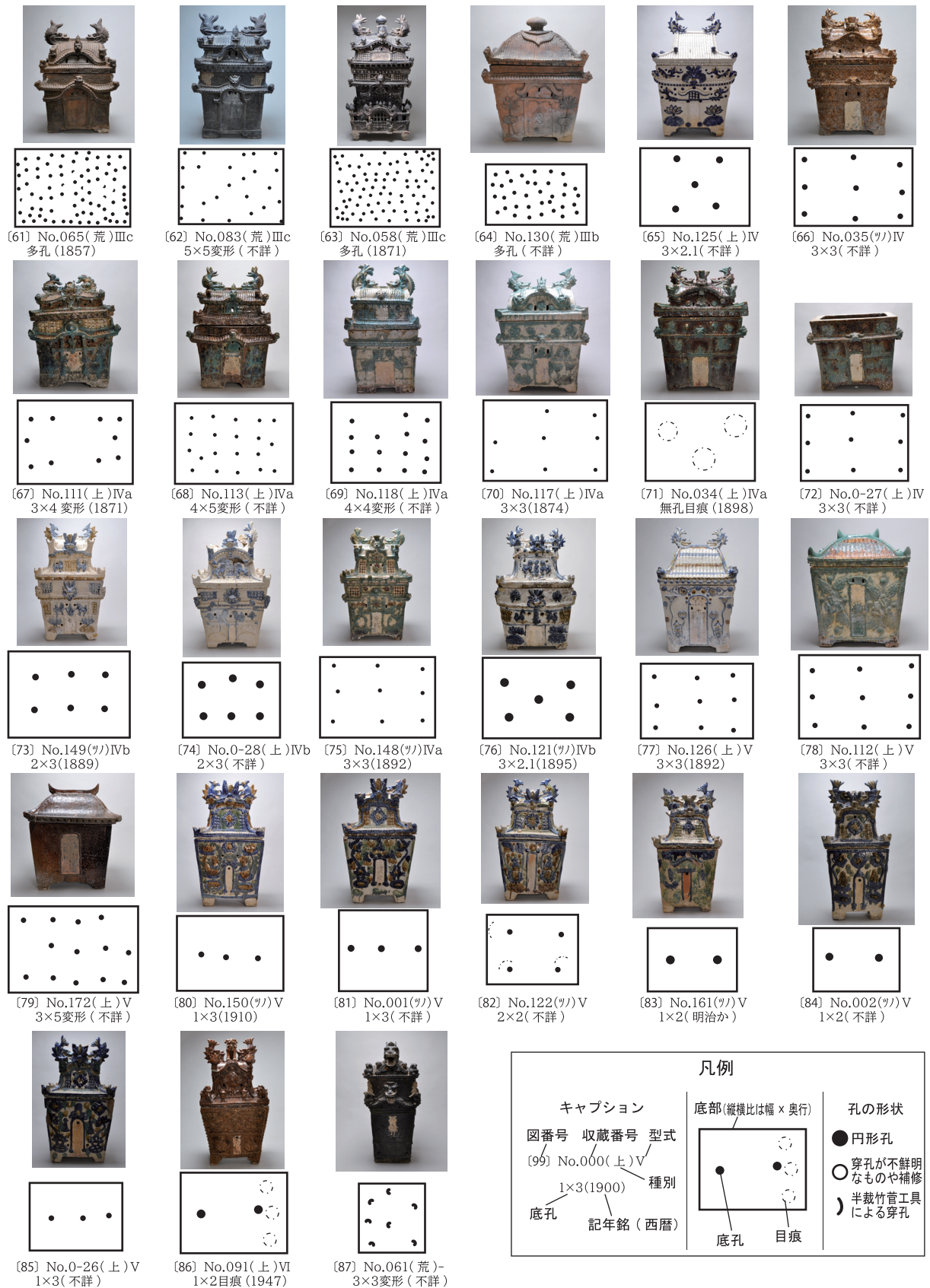


図6 壺屋焼物博物館所蔵陶製御殿形厨子(3)

Ⅱ式は、そのほとんどが3行4列もしくは3行4.5列となる。また配列の整わない多孔のものも、10~15孔程度と後述するⅢ式段階の多孔のものとは数が相対的に少なくなっている。

Ⅲ・Ⅳ式は、3行配列のものも認められるが、4行もしくは5行配置の例が増加し、多孔の資料がこれに加わる。孔のサイズにも、変化が見られ、大小交えるものや、孔のサイズの小さいものが散見される。なお、泥釉が特徴的な資料〔27・29・30〕は、製品の特長からいわゆる古我知焼と推測される。これらの資料はいずれも配列が整わず、かつ〔27〕は全体的に方形の底にひし形配列させる特徴が認められる。このような配列のバリエーションの一つに窯や陶工による相違が指摘されており興味深い。

V式は3行3列の9孔のものが若干あるものの、1行の配列に孔のサイズが相対的に大きいものが出現し、これが占有的となる。

Ⅵ式は2孔の例が1例のみだが、V式が3孔であるのに対して、減じていく傾向もあわせて指摘することができる。

		底部穿孔												計
		(1)	(2)	(7)	(9)	(10)	(11)	(8)	(6)	(5)	(4)	(3)	(12)	
分類	I	3	2	1										6
	Ⅱ			11	3	1							3	18
	Ⅲ	1		3	5	8	15	2	1				5	40
	Ⅳ	1		1		2			4	2	2			12
	V				1		2				1	5		9
	Ⅵ											1		1
	その他						1							1
計		5	2	16	9	11	18	2	5	2	3	6	8	87

表2 型式分類と底部穿孔の相関

おわりに

本論では、厨子の底孔に着目し、門上コレクションを対象に検討を行った。コレクションに限り検討を行ったため、厨子甕中の白眉（上江洲 1980:366）とされる分類Ⅲb資料に偏り、おおよそ優品で構成されるため、全体的傾向を示しえたかという疑問があることは否めない。それでも、底孔の傾向として、無孔のものが配列を雑にしながら孔数を増やし、近代に製作されるものになるとその数を減らすこと、身に孔が穿たれ、孔のサイズが大きくなるなどの変化の方向性についてもある程度確認できたと考えている。

また、古我知焼で例示したように、孔のパターンも陶工による差異があることも追認することができた。

本論を執筆にあたり次の方々からご教示頂きまとめることができました。記して感謝申し上げます。

安和吉則、伊集守道、上原静、江上輝、倉成太郎、鈴木悠、高嶺よし乃、比嘉立広、又吉幸嗣（五十音順敬称略）

付記：本稿は「葬墓制からみた琉球史に関する基礎的研究」（基盤研究C、課題番号18K00981、研究代表：宮城弘樹）の成果の一部である。

《参考文献》

- 上江洲均 1980「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』新日本教育図書 pp.341-374
- 倉成多郎 2005「厨子甕の製作について」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第6号 那覇市立壺屋焼物博物館 pp.1-7
- 鈴木 悠 2015「門上コレクションの銘書について」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第16号 那覇市立壺屋焼物博物館 pp.7-32
- 那覇市立壺屋焼物博物館 2014『沖縄宗教藝術の精華厨子 門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念報告書』
- 宮城弘樹 2019「御殿形厨子の研究（1）—紀年銘資料を中心として—」『南島考古』第38号 沖縄考古学会 pp.1-20
- 宮城弘樹 2020a「御殿形厨子の研究（2）—赤焼・荒焼御殿形厨子の編年—」『南島考古』第39号 沖縄考古学会 pp.115-126
- 宮城弘樹 2020b「御殿形厨子の研究（3）—上焼御殿形厨子の編年—」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第22巻第1号（通巻29号） 沖縄国際大学総合学術学会 pp.23-39
- 吉田健太 2013「「門上秀叡・千恵子コレクション」における厨子溶着煙管の検討」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第14号 那覇市立壺屋焼物博物館 pp.61-71
- 吉田健太 2015「甕型厨子における近世紀年銘資料」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第16号 那覇市立壺屋焼物博物館 pp.33-52

付表 門上コレクションの陶製御殿形厨子

単位: cm

図	同館登録番号	種別	形式	型式	底孔（備考） 【体部穿孔】	基準紀年銘	事跡	西暦	備考	蓋高	身高	口径 奥行 幅	底径 幅 奥行	
1	No.123	赤	A	I a	無孔					19	40	31 33	34 31	
2	No.129	赤	A	I a	無孔					23	42	35 38	40 32	
3	No.119	赤	A	I b	無孔					19	37	36 45	47 35	
4	No.124	赤	A	I b	中央1孔	康熙 47	洗骨	1708		18	35	33 44	43 31	
5	No.156	赤	A	I b	中央1孔	康熙 1	死去	1662		23	37	38 48	45 33	
6	No.160	赤	A	I b	3行4.5列（変形）					23	42	43 73	69 42	
7	No.155	赤	A	Ⅱ a	3行4列	雍正 13	不詳	1735		18	41	31 49	47 31	
8	No.141	赤	A	Ⅱ a	4行5列					27	40	39 49	48 37	
9	No.152	赤	A	Ⅱ a	3行4.5列					26	47	34 46	45 30	
10	No.145	赤	A	Ⅱ a	？行5列（変形）	雍正 5	死去	1727		23	37	39 48	47 35	
11	No.163	赤	A	Ⅱ a	3行？列（変形）	乾隆 6	洗骨	1741		28	43	35 57	55 35	
12	No.168	赤	A	Ⅱ b	3行4.5列	乾隆 27	洗骨	1762		24	46	35 49	45 32	
13	No.158	赤	A	Ⅱ b	3行4.5列	乾隆 24	洗骨	1759		25	44	32 48	45 30	
14	No.159	赤	A	Ⅱ b	3行4.5列	乾隆 19	不詳	1754		23	46	36 49	46 31	
15	No.144	赤	A	Ⅱ b	3行5列					27	37	34 43	42 30	
16	No.143	赤	A	Ⅱ b	3行5列	乾隆 28	不詳	1763	雍正 13(1735)	22	34	36 45	45 31	
17	No.162	赤	A	Ⅱ b	？行5列（変形）					34	54	45 65	62 43	
18	No.167	赤	B	Ⅱ b	3行4.5列					34	42	36 49	44 30	
19	No.147	赤	A	Ⅱ c	3行5列	乾隆 13	洗骨	1748		38	49	38 50	50 38	
20	No.164	赤	A	Ⅱ c	3行4.5列	乾隆 42	洗骨	1777		31	46	39 48	45 30	
21	No.157	赤	A	Ⅱ c	3行4.5列	乾隆 45	不詳	1780		28	45	36 47	45 32	
22	No.151	赤	A	Ⅱ c	3行4.5列	乾隆 50	洗骨	1785	乾隆 25(1760) 洗骨	26	43	34 48	45 31	
23	No.153	赤	B	Ⅱ c	3行4.5列	乾隆 36	洗骨	1771		30	44	32 48	45 30	
24	No.154	赤	B	Ⅱ c	4行5列					35	45	36 52	51 33	
25	No.115	荒	A	Ⅲ a	3行5列（変形）	乾隆 43	洗骨	1778	乾隆 59(1794) 死	32	45	35 47	41 29	
26	No.116	荒	A	Ⅲ a	3行3列					29	43	34 46	43 32	
27	No.075	上	A	Ⅲ a	多孔【S2B1】					20	35	31 40	40 30	
28	No.070	上	A	Ⅱ c(- Ⅲ a)	3列3.5行	乾隆 16	洗骨	1751		23	41	41 44	44 38	
29	No.072	上	A	Ⅱ c(- Ⅲ a)	3列3.5行（変形）					27	45	36 41	42 35	
30	No.073	上	A	Ⅱ c(- Ⅲ a)	3列？行（変形）					28	41	31 37	34 28	
31	No.134	荒	B	Ⅲ a	5行7列（変形）	乙丑	洗骨	1745or1805	乙丑 1745or1805 か	36	40	36 47	40 31	
32	No.059	荒	A	Ⅲ b	多孔					44	43	43 52	45 35	
33	No.127	荒	B	Ⅲ b	多孔					39	40	30 45	37 24	
34	No.063	荒	B	Ⅲ b	多孔	道光 12	洗骨	1832		43	38	34 45	40 25	
35	No.078	荒	B	Ⅲ b	多孔	嘉慶 9	死去	1804		38	43	39 45	41 31	
36	No.060	荒	B	Ⅲ b	多孔	嘉慶 17	洗骨	1812		39	36	34 43	40 29	
37	No.084	荒	B	Ⅲ b	多孔（大小）					48	37	35 49	41 25	
38	No.086	上	A	Ⅲ b	無孔（補修？）					23	41	34 49	52 34	
39	No.136	上	A	Ⅲ b	3行5列	丙辰	不詳	1796or1856	丙辰 1796or1856 か	42	44	33 48	43 30	
40	No.131	上	A	Ⅲ b	4行4列	嘉慶 22	洗骨	1817	嘉慶二二丁丑と仮定	33	39	37 45	40 33	
41	No.170	上	B	Ⅲ b	3列4行	同治 12	洗骨	1873	道光 23（1843）洗骨	35	51	33 49	53 35	
42	No.132	上	B	Ⅲ b	補修の為不明					41	43	29 48	50 29	
43	No.139	上	B	Ⅲ b	4列5行	道光 25	洗骨	1845		36	41	29 47	45 28	
44	No.133	上	B	Ⅲ b	3行5列（変形）	道光 1	死去	1821		36	35	25 43	38 22	
45	No.138	上	B	Ⅲ b	3列5行（変形）					37	36	25 42	38 22	
46	No.174	上	B	Ⅲ b	4列7行	道光 9	洗骨	1829		51	44	43 54	48 30	
47	No.166	上	B	Ⅲ b	補修の為不明	道光 20	洗骨	1840		42	38	33 50	45 29	
48	No.169	上	B	Ⅲ b	多孔					40	41	35 46	43 33	
49	No.140	上	B	Ⅲ b	3列4行					34	40	36 45	38 32	
50	No.165	上	B	Ⅲ b	多孔					36	41	39 46	43 35	
51	No.128	上	B	Ⅲ b	3列5行（変形）	咸豊 11	洗骨	1861		38	44	37 47	40 29	
52	No.090	荒	B	Ⅲ c	多孔	同治 11	死去	1872		33	42	33 44	39 28	
53	No.064	荒	B	Ⅲ c	多孔（大小）					30	33	23 37	30 20	
54	No.062	荒	B	Ⅲ c	多孔（大小）	道光 27	洗骨	1847	咸豊5洗骨,大正9合葬	36	47	34 49	45 28	
55	No.135	上	B	Ⅲ c	3行4列	咸豊 9	洗骨	1859		42	41	34 41	41 30	
56	No.137	荒	A	Ⅲ c	4行6列					35	44	36 51	37 29	
57	No.114	上	B	Ⅲ c	4行5列（変形）	同治 3	不詳	1864		40	42	34 43	39 28	
58	No.142	上	A	Ⅲ c	3行4.7列（変形）	道光 2?		1840~1849		31	48	35 53	52 31	
59	No.173	上	B	Ⅲ c	4行6列					39	50	31 48	45 28	
60	No.171	上	C	Ⅲ c	4行4列（変形）					24	44	28 32	28 28	
61	No.065	荒	B	(Ⅲ c)-Ⅳ a	多孔	咸豊 7	不詳	1857		35	39	32 42	40 27	
62	No.083	荒	B	(Ⅲ c)-Ⅳ a	5行5列（変形）					39	45	31 42	39 28	
63	No.058	荒	B	Ⅲ c-Ⅳ a	多孔	同治 10	不詳	1871	台座：高 34	47	40	36 49	38 27	
64	No.130	荒	C	Ⅲ c-Ⅳ a	多孔					24	40	32 46	35 21	
65	No.125	上	A	Ⅳ	2行2.1列【S8B5】					34	45	36 46	38 27	
66	No.035	ツ	B	Ⅳ a	3行3列【S4】					36	45	37 49	41 27	
67	No.111	上	B	Ⅳ a	3行4列（変形）	同治 10	洗骨	1871		30	42	35 44	40 29	
68	No.113	上	B	Ⅳ a	4行5列（変形）					38	40	37 46	41 28	
69	No.118	上	B	Ⅳ a	4行4列					44	41	33 45	38 28	
70	No.117	上	B	Ⅳ a	3行3列	同治 13	洗骨	1874		32	45	36 50	43 28	
71	No.034	上	B	Ⅳ a	無孔（目痕有）	明治 31	書換	1898		31	43	36 46	38 27	
72	O-27	上	-	Ⅳ	3行3列						42	47	34 41	29 29
73	No.149	ツ	B	Ⅳ b	2行3列【F2S8B3】	明治 22	不詳	1889		45	47	35 48	38 27	
74	O-28	ツ	B	Ⅳ b	2行3列【F2S8B5】					-	44	47	34 35	27 27
75	No.148	ツ	B	Ⅳ a-Ⅳ b	3行3列【S4】	明治 25	洗骨	1892	光緒 11(1855) 洗骨	44	46	36 48	40 28	
76	No.121	ツ	B	Ⅳ b	3行2.1列【S4B3】	明治 28	洗骨	1895		44	42	37 49	41 28	
77	No.126	上	A	V	3行3列【S4】	明治 25	洗骨	1892		37	43	33 45	39 26	
78	No.112	上	A	V	3行3列					21	43	36 50	42 29	
79	No.172	上	A	V	3行5列（変形）					26	45	37 51	45 30	
80	No.150	ツ	A	V	1行3列【F2S4B2】	明治 43	不詳	1910		44	47	36 47	37 26	
81	No.001	ツ	B	V	1行3例【F3S4B2】					43	45	47 36	36 27	
82	No.122	ツ	B	V	2行2列【S4B3】					45	45	35 48	38 29	
83	No.161	ツ	B	V	1行2列【S8】	(明治か) 四十■	不詳	1907~12		42	42	30 37	31 22	
84	No.002	ツ	B	V	1行2列【S4B3】					45	43	28 37	30 22	
85	O-26	ツ	B	V	1行3列【F2S4B2】					47	43	46 36	37 27	
86	No.091	上	B	Ⅵ	1行2列【S4B2】	昭和 22	洗骨	1947		49	46	35 47	37 27	
87	No.061	荒	BorC	Ⅳ a	3行3列（変形）【F2S4】					21	52	27 27	23 24	